



梁
後
集

四

^ 2
4328
4



2
4328
4

4
4350
4



琴後集卷七

題画歌

井上殿日く伊りくむ人あり

朝日くをまほへる春の川の氷よみ雪のさうえやくみくま

山里よすむ女子日すあり

これうつゝかきてやみ雪も積る海しこる位山のふたの三郎あり

川の菜梅とて候

み雪もきてちきる小松乃すり衣もそら成つきの野人の川の菜ハ

新と分て山里より人あり

ゆくす小霧む山影をあられなる流きも雪厚くあそ思へ

梅の名よ



雪もさそこれぬへーうぬれふ以爲香おほゆる雪のよほひふ
梅のふりもさあふさふ

たかばう風をたうめの香をさへて枝ーやとせそめよ乃月
籬の梅さけいりてる人あり

たちとゆらゆらと香もさよほふなるかすの梅乃これの夕風
ゆらゆらとあまのいもさうもさなほよのふさささ

はくーがく梅さくあまゆらせー若た不ゆるまふやあぬ
人くあまひーいふの梅は梅のそれさきり

梅のそれさく木のもふわく笛を吹くもくささるら社すれ
梅のふささきもは梅をすんこ人ゆく

夕風一ー雪とみられささる梅をたもとよけくあまの梅人
梅のふささきもは梅をすんこ人ゆく

もささすいふのもさふ笛ふく梅のふちれさ
庭もせふ梅さくやとは笛吹のあきよる風も香もさよほふ

うみりーんをささきほいさくは梅のよふたも梅さくやとのあ
梅のそれあり水智あさふ

霞ささふさの梅をさささる梅をけのうの乃ふさささる
梅のそれあり水智あさふ

紅梅の梅乃あま入ささる
くれあさ乃さ際の梅さーはのよほひをさへて雪もさく

下ありあふ雪とささる梅ささる梅のふれなる
初午いなり梅さく男女たかくゆふ

いささ梅のうちよゆふなりかさーの夜もふさささる

さしひさし女がみひさきなすてあり

さしひさし女がみひさきなすてあり
つひすこれの歌よ

その野をゆくよすこれ下わらひはしてききふの家つとせん
はり〜の歌よ

はり〜の歌よ
女柳の枝をいえてととり

柳をいえてととり
柳をいえてととり
柳をいえてととり

さしひさし女がみひさきなすてあり
人の家もやなき梅あり

さしひさし女がみひさきなすてあり
人〜ふの〜あきよ

梅とれあれとふやいぬのむへきあぬう流よきふいよらせん
たゆ〜人〜の〜

さしひさし女がみひさきなすてあり
みちゆく人梅の花をいえてととり

駒とあてあくよ〜いんひさきなすてあり
人〜これの〜

おとよらん〜ぬふの〜ひも〜

山里のふさ紀よりみる人あり

いぢ之里かくとはつきん山里のふらうりそ人も社まを
やも里も梅のそれ乃さきまは里人のいひつふ
いぢのちゆやいつ木のむをそれこそ人を先さあきれ
つ枝をこれよゆせよふさあうやふはとちてかき

梅の木乃もまらひ

ゆくうちのむをよまらと引つれて肩ぬく社も香を白
多花ふくれあふ

ちとともまふふさの山梅やまへまのまを
大原女の黒木おひさの枝よりまを
まはすこやつく社もまをまはるまを

苗代あま梅のちりうらま

若くれてまをまのあま苗代のあま梅はゆせつ
梅の枝にゆくくを筆よ入る

一枝りこれゆへまはまのあま梅をゆく

苗代のあま

咲けくふらまをまを筆まをまをまを

梅のうま

吹さるふ風ものまをまのまをまを

山田のあま

すまうま山田のあまのりまのりまのりま

たのむ人ゆをま

扇のりりりかききたるはこころのけしきもこころのけしきも
雲雀のたれみこころのけしき

あふともんをぬまのくひよりすみれの床やうすれぬらん
人よ其の野はあまふ

たふとちすれ扱つてむすべの根も木根もきふらん
ふとあてををあれむ其のいふはゆくのすはこころ

曲水宴のうた

なうの波るのふらさるはふよをきたるなりやくみてあや
これのもよよりあは波の盃をちうれてきたるなりこころ

もこのふと女どものとふ
石のころめ乃神とえゆれとよほふもこの初茶

海棠を

春の色をふもこのいさよほはる人街をたれふの梢々
山吹さるる家の人來るらん

ゆきとちうめよ山吹のふの離をたれこころは
よき女友のこれをもてあまふ

紫乃のほもほへる花のこれとたれ
ふ牡丹の緒よ

月宵のたよふをふのうほいこころふみ原ふ
神よほふ

神のまは枝のまはる夏よこころは
卯ふさるる月あり

うのこれ乃も侍へる名にたのほりし月の光も世ありてりきり
おのふこけやとをさふ人あり

たち久し人にもほきんうのふのよほひよほしき玉何のさ

うのこれさきき 歌よ 郭公をよ川

すのふもそや咲もけりほりおほしなるもほの家有よおき

松とてさかきよ 郭公をよ川

ほりおほしなるや松生の柳よりこのやーほり夢のおちくる

郭公おく山はと女くほり

郭公夢すもくこひくれおまなすてぬ山のおくもかま

淀のこころよ 舟ありほりききす

舟よほふちよあこへる郭公よふのりりよとらく人き

あやめおく歌よ時常なく

あやめ原に家くるも 月おのよふくやのぶとの山ほりきた

雨あけ日人おほくさかへ

子苗さかきやいしくほり月あみくれてや 田子りすう笠

さうふとさあまのさかきもあり

ありも入ておほしなるあやめ原にわかれ人もありき

かさすももやさてもまぬあやめ原に世をやらさるん

女月昔より引いてみる

あつ約よまつくねがをよとくやまのほりひきそん

お月昔の約くへす

神の香もこゆのあなみもかこけり神乃原おきこひお

世ちこれの嘆くもお恋の心と

神の香よふとちこれとすそへはくもつうもあはれそふは

茶の匂

茶も本もこれくふちきれもやまほひのおやと人のみん

たうふとふ

なほこれい先とそとこれふよ布のこをきこぬ縁を時とて

すみそふ

おちよまのち好まはれもこかおちるむすへ度ふりきり

河乃ほりよすみそふ

むすふよ波子の月とやうつなほとけすも河つづの若

西とちゆへち度よすみそふ人あり

村雨のふりすー地言のよふとそとてゆふ風きく

いつよ月の氣うけりもそそかもみねる大徳を

笛ふきそけ人あり

水のちよー月とやそそ編をよそいつくは笛の音をすやん

女のあふきもそそか

なうー地風のやうとよあすやあれはあふまの名をれむん

相のほ乃ちりこか

もほくちよなうひもこれかちんいきりの廣葉や月よりか

白萩の匂

夕月の氣とみこちそそ此の房もほる志はえこきり

七つ月のふとくきるあ

かゝりきひもどくふのせらけは秋のあそれをいつめてきみ
女希ふの原

いく秋もさうあせぬいそふへ一昨乃ふとやハア
馬よりさう人秋のをり

かぞえ秋の原もあはれもりをとれあきあぬはゆりせて
野のふさうりひきそ人あつたりとる又
とるふもあり

ちりいそらつんもささもやちんはのふよんをひくれぬか
秋のふともうとるふ

いゆく乃せの者あう梅一よそんれ秋をさう
秋海棠の原

いうあれ秋の原の下系よまのよほひを移さむ
野のふれうかきとるふ

夕霧をよるふ月もさう秋のさや乃ふもほあはれ
琴の祢もすみやちん秋の野乃小棠もさう月やとる
家よ女月をみ

わさるう紀身のともさる月いよもたもとのふさうきや
月秋よ女乃家よとるおよりてわ

うちほきよ人さの世もなぐもの月をのさやと君やとんへき
女車をさう月をさうた

玉すれう原あはれさう小車もねもなきさう月をすみき
秋の月たちうはさう池ある家

すむ人のあつるをさへよくみてらん月おやうるき宿の池あり
と月ほり宿の夢すつこと

かほしゝの田かゝるをよこさへほん和原のよれ夢いさつや
約むくえん女車あり

月をさへ原さつる枝のさすれたおつるありやきり原の約
人の笑れ屏風よ油のほりよんて月々さへ

わつものかきりのまさるゆさうさ月もほりおあつる
菫のひよりたてるかきり

とちあつるよとやうめん聖への麻ゆめかきりほん書かきれて
大屋何りの七十れ笑は葉のふりつるまきまの
ふくれさるかきりさる繪とたてるさへ沙田ののれ

うあよめとるなれい

かきさるもほりさるのトあはあとあはあおさるはらとる

稲刈あり

里さるふりほりの秋をのりてりひある秋のほととえん

菫葉袋のうさかきり繪ふ

山人のあつれとありのいく薬うけてやりよれ秋とあきさる

紅葉の折えささるさるあま

一校りみさ乃秋ささるさるやちり家ほりのまほさる

笠根ささみちおほりさる

笠のほりまみちささるさる旅人のやまがさるほり神さる

山ささるさるさる人あつる

かゝる一軒は神山人山をなれどもみちをあるもみちをある
細代よお袋のよせ

おもみちのあはれはかゝるに此の秋ははるみちや
あはれはる聖子ゆへ人あり

旅人のあはれはちよるまをちよるまをちよるまをちよるまを
女すこれのもも立て雪のあはれはるみち

それよの梅は雪はちよるまをちよるまをちよるまをちよるまを
あはれの家は雪をちよるまをちよるまをちよるまを

けしよてよち雪はれはちよるまをちよるまをちよるまをちよるまを
高殿は雪をちよるまをちよるまをちよるまを

ゆふふれはちよるまをちよるまをちよるまをちよるまを
ゆふふれはちよるまをちよるまをちよるまをちよるまを

山をなれどもみちをあるもみちをあるもみちをあるもみちを
雪のあはれはちよるまをちよるまをちよるまをちよるまを

雪のあはれはちよるまをちよるまをちよるまをちよるまを
雪のあはれはちよるまをちよるまをちよるまをちよるまを

雪のあはれはちよるまをちよるまをちよるまをちよるまを
雪のあはれはちよるまをちよるまをちよるまをちよるまを

雪のあはれはちよるまをちよるまをちよるまをちよるまを
雪のあはれはちよるまをちよるまをちよるまをちよるまを

雪のあはれはちよるまをちよるまをちよるまをちよるまを
雪のあはれはちよるまをちよるまをちよるまをちよるまを

雪のあはれはちよるまをちよるまをちよるまをちよるまを
雪のあはれはちよるまをちよるまをちよるまをちよるまを

月次の屏風乃料 三月小垣山

大原や神乃ちやほと記よめすふ玉しく斗言れつもんる

神樂せまふ

己所をきみ若れ不えそ人長たらしふ神も神さひまきり

年々れて竹ある家

かゆよりまの危なる竹垣も竹のさうひも厚そてさうまを

松と軽日乃弦

すみのは乃波もほひいて軽日ふく彩さうの月さなるの松と

小倉の君れお十の笑と松の傍よかきほき

も他人のあせよゆさへとうたふまを山松うんも夢あもせけ

たけり人きりのほりりなる松のもまやまみて波の

ふるまふんか

波あふふれきはほほいさうと松うのまうまう法え

松と竹とう名とあそ女らあ

松もふとかろめ中もからうやあせのとちある松と竹と

霊芝の名

るくひなき種とこころれ石の上よあせとうきてあある神家

岩の上も種とてま

岩のうへもいれあももクーはのまほひうれて浦傳ひせり

鶴の名

月ぬとて先つきをむし初よりれ夢まこへて何やこゑるふ

きぬけよう記をかこらんちの音を老いねまあのみとこりけ

能の歌よ

うねまほむのよふりいそ河のふりよあもく身をやせける
秀星の信よ

ふせはまんたのよみすと世祢乃からる雷や言くかきり
うさ紀の歌よ

くれそむらとふりもとの志信うさ紀月の新しとんを恒久は
桃李原の信よ

かかれのまややくよの名信とふよのいそとはやし相を
亦取の祢乃歌よ

あられとそせよや信とそしなる井のびたり花のうは
暮うちとふよ

何回名のす信となれたるも信ともあくふも志とさうあむみん

白川が将殿とそくをなみやうを成をあらうかせ
信いそられよあひらあはちのめかともあうち

そりよあもまうれいりきりうはあはよあもひのまあお

そんあのはつらつらうまひよ

溪のこけふたもまはくつ名のあひまのまもやさひ
うれめのあまのりさうかこ

さうあまきよとばよほせつはああぬあそあのいひ
京は家よ市女本より酒う

もろともよ破とすめよまほし君たのあここのいさかきよ

とけつのはら

大うも田子いりきりそとらなはは 袂もはつになれやうは
茶具いりうけしめ 絵よかきと人のいひきれ

空をみるすけもうれしうれかのおのあしーいんすむよは
甲よのいれあし

あ代ー神さひさてる 甲よのいりーりやもあまもきり
あてはのいれあし

あさほ心神のりよきのきろくして 雲井もさてる 夕きりり
二神の絵よ

おありのよも 動しあし神のゆきぬくーあはの絵
よも絵の島よむのうとあまか

いれやあぬほとんをて 浦いぬきあひきんりつあ宮
海乃ほりりい風をきぬ

風をいりみ 渚もあまもあまなるあーのと 浪ももつ
流のあし

惟もあまもさしせし 布もまてあまあまをあまのまよ 深つ
たつと河乃あし

もみち葉の流きてたようくる 水の秋をやあまあし
茶よーの絵よ

あうれあまもまよととや 下つぬあまいぬしちの河を
越の若乃小川の河原風の絵

正月 子け日す家

引うら子日れすのの如きうらよ世とあめてもみゆるあふ
二月 いなりほうて

うらよらよの松の葉うはすいありふみのうらよむすく人々ほへる
三月 うらよのうらよ人らふみうらよ

梅をれさく木の中とまきあさちやすうらよ人らふみ
四月 卯ふある家と郭の色

郭をなくうらよたえうのうらよのうらようらよのうらよ
五月 あやめひくうらよ

うらよ根かくあやめあやめうらよのうらよのうらよのうらよ
六月 ほへするうらよ

秋風を神よやくてうらよ一具をはすうらよのうらよ

七月 きれうらよはうらよ

きれうらよのうらよのうらよのうらよのうらよ
八月 ほりうらよのうらよ

うらよのうらよのうらよのうらよのうらよ
九月 人くきうらよ

うらよのうらよのうらよのうらよのうらよ
十月 女らもあふひらふ

いさうらひらふあふ神の色うらよのうらよのうらよ
十一月 かうらうらよ

はまもあふうらよのうらよのうらよのうらよ
十二月 松竹も雪うらよ

布らううへよりやふる雪やしの竹よりあらの子を
らたこみす

琴後集卷八

百二十首

五月廿日

惟風を求るる際の人乃らあまけふとほはあよきり

子日

いつてもとほふにあらず小松原うらのまきひくれあめんと

わくれ

於人ゆよきかてまもすこあきほあくまつむやたりとあ

白馬

あをむけ毛はほもけそてみゆふかき日引るはむさ記の危

けりりの雪

雲と霞す借のねぶらえて消のらゆふや波とゆき
霧

秋と暮のまねふかたるやうに年の長そに叶すみこもり
かやうふ

かきけふのもゆるとにふめはまきのくは野まていんぐ
うくひす

雪のなぐ初夢とまきくと記は老もはるくちをすれ
いなり宿

秋と暮のまねふかたるやうに年の長そに叶すみこもり
春返

春の海やちふまきとゆき夕な紀は霧むあうらを返まなりけ

如梅

おもほへるうめや中春のいほをふむはけめあはれ

柳

老ありさうさふ朱萼の玉やなき春のくもくる名は社をん

さん

さかりあはる山梅をまてくれはれゆめせをもむくはきふ

と日

のぼるふまふもぬさとちるふとに記はふらん春の川あ

春の田

春のまはちりふとすきく雪はちりくら春のま山田

か

那のゆく馬よのそれいさなると一ねに後のやうかくなん

五月

かくてこそあれもまはせほめくとかすみあうまの月

すれ

まはせと茶よやほくたつてもすれつと人と人そとひき

友

池あまほる色の深きれとゆらとはふの名よおほきん

君れとそ

ちや跡くしれいふりもあまものとほせふとそを何し

衣久

めよかろ友のうほもいづくともふの香とそを後とそは

ほろおん

明をひる名根の園乃中とそ守二に番とそす何ふのそ

神まはと

あふひ茶川をたうそそあれいさききかつの甚信りて

五日

朝もふくけふのあやめ乃それなして引あそふいさりなり

きらこれ

あふふのそれさく若のいつをあれと雨のゆふへそそとそ

あふき

風をよなすれ風の之をふうひとへなとわすそそ

なとそ

かゝりきと記中よれなるのゆゑも侍るなりとのふ
あふち

入目されかゝ山をや―たぐとてちよやあふちのふ乃夕くを
ほし

草ふき四甲一のしつれをよみとてせそふきふ
栲河

栲ふい舟されやと棹よちる房もみれそとゆ。かゝる大の執
取き大

くれとてぬ君よきなりい先とてつゝなきとてしつふ汁―
氷むら

消ぬ方と於へしとくおむるも及ふさとのほとやとてん

薬のり

せしきと夏四のそとのくすり栲いつらよ麻乃法いとむし
夕とち

甲かゝらよ川とありけいさゝあやとりやとひん四ちの旅人
なりの板

國つ鬼々いのそと―大五此法門乃とふとて―つれい
初林

をよ尔やとと栲よおぬ能あう―甲ふへに秋やとほ風とく
なぬの板

栲とこのうほもやよくとてんすあひの水よかきうほ
を記

男をふくめてあはれとたもとやあふまむすふ庭のをよ
もき

言師やそのへり秋よ美人のむーかさきー萩のあぢ
をくれば

はなりの心ほよ嘆ともそれーとほて色へき秋の野へは
十五夜

思なれらんねりのすも母もと宵は月とあはれもさ
約むく

あふきの関乃あかきあふふ山あふれ岩あらの駒
あ

さほくのふよなれりー袂はわらぬあともれともみ
さ

お物
あひららわら峰のかきそー未消て後よく似る夕ぐれの出
ねむ

位あれーむの門よ夢とそ人よほちをあーかほある
鈴虫

夕されハあぢるその秋風ふりいてふく終むーのあ
きりくす

秋よあすも君秋の麻乃きわくはるかなねの君とあはれあ
麻

山彦のうたふつらふ麻のきハくまの岸はあけしほし人
秋山

秋山

秋心そよれそといひーひーもあぬもちやくはまきあ

聖分

もくはのふいさうてもうはうは秋のすほ四よのふゆこ

秋心

けろ来りつらりそめてお花のうほあさや色よはく

秋心

やもー火いけきほくせと強う秋よはてふき秋の思ひをさる

秋心

よもはくー麻のさそほもゆもす油ようほや袂とゆきふ島人

菊

一もくもあらんはよのむいさ秋のゆりりゆれぬ菊のほい

くれの秋

う紀ときこいふふとからちてきふいすことゆぬ秋を何うむん

時雨

さろゆの乃いつれいあれと冬こそを急降の山を先をくれきる

水

けがのふすはのあふこれ厚氷津のをーへーたにまよはさ

霜

本くれや棚の音も出そよゆく風さゆる危乃軽ーも

あき

やま風のあふふささけふ志中を来柄うられてあきささる

綱代

よりあるに根柢やふるあし浮人ともぬけりのひきまをた
落葉

日よそへて落葉うらうらくこもきりなれし
あ木のたもとに
水竹

世よそへて人よそへてあぢのやすくはよう知れず
初雪

霜人の神あきくすねんすかぬあすきまきまきまあし
雪

すみろめの夕乃雪の絶るよりなほくれのささ雪
岩の油

冬もも福やうすすみぬのきりうらうらひきまのひき

埋火

おもふらちかきいあせきとのねと火をきのた乃あし
みり

五節

こや人むとよのありりのふらうとそかぬく斗あひまはけり

かくら

やほとらふ玉らあの名よ引てかきせんとうらふよはれ

佛名

罪とも佛の活名も死さうと呪くきてもれとすまはら

おののくれ

らまへくおもへはとあし年波とせんとのあへしは

まのぬ人

よひきぬ人よあやなくはらふよはらふいふきぬ人よあはれ
いひきぬ

きよきよにたもひつみく目をまへいふてやむいよくほあはれ
いとそおもふ

いほほよ神やくらあ人よふいよ人よいよそのの森乃三つくふ
けいめであはれ

あふらふいよほふすりのかりあはらふほらふほをみてほふ
あひおもふ

中くもいよむいよもたふりたおもふふのんすほみよ
おもももあ

うらもあふらふいよたにくや戸のそほくいよもあはれ
いよもあはれ

すほつひまかくてやあをいれあふれてよあひいれあはれ
よあひいよあはれ

あふらふいよあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれ

うらもあふらふいよあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれ

恨しむぬ一よほりりのねれとも情のわらいとそふう後
二取へこたえ

きのふふいまふの細布ひませもみあもてと骨も吸えやす
もの屋こてあ

かつこても程ろこもれつと車よたもがうせし神のからりハ
名よこしむ

赤いかな命いさてもそのあへせあう紀名の流すすもふ
きののじ

君そのこらむんわのうらまのいつらうは訓一身なれと
よんとの屋あ

とまのこまんくうへよゆきと名もくういとともと情め

あふとこあ

もは原のあやういもあうりきりむゆふとらめあぬ情よ
たもひやす

下級のこられつとたもへてやとまむすふまよせ人
おもひつ

あしそはななほらうのし言もあひわれなうと
むいあ人

こらふおてきうりいんあしうらもめう後と人や
ういあ

あしそはななほらうのし言もあひわれなうと
むいあ

あしそはななほらうのし言もあひわれなうと
むいあ

琴弓あれハ露たすもまのほりこのしん人のふとらとそめ

人ほま

いらなれハ葎もす悟しとそふんわの床をのふなまふ

かられ妻

志のふれいう死にれ底の玉のしあふそれてあふすれあれ

山里

山さとはくまひようくま谷あれく流なくも年とそふれ

そ飯

君くさあやもほきう一若代よいらの松のほきあつまでハ

布るはと

取つちとくとひくそめ花を風とくのねういっつとまふ

井

心さとのじり一若のんをそあふちもさう久ほ井めすほあ

関

若く代も七つのた乃國人もい何のせきとや危すくいん

関

志く玉はありとも値うかつくつきこの岩園乃そいひあれハ

津

かくて身さう一とふおもひもあせ何うけれせとも待てん世

やれ

せれとめてこふとさうゆくと田河やなせの波をるもとそゆ

さうか

一 志きりありある雨は露をひて澄ていあすふ波乃うこり

釣

かくて身はちり江もくく釣の糸はきひくれぬもんやすや

翁

やもすれいわつこく申よいとされてたきれさひくも身をいせ

うたね

うたね子うけありの髪をなつるが老よあえよと思ふくは

法師

むつと死のきまの身をやすけれ世のかりますぬあのお

車

かまへはくられの車もあきもの子何よあは名はさこむき

舟

ちりうふ波の本の葉もみま斗仲よ家はさふありのう

使

玉

いとせあやうやうえり玉の枝さへもたもひくも種さよき

粥

たすいづるこゆもろくしの糸とあれやま粥よくは

布

たうあまきしせる布を袴のめつしはよと身は

琴

うたをよみおもひしむかたはさきかたのうたをよみおもひしむかた

弓

弓とて入るま弓はまゆに糸にあれとまよふゆふよんこいま

うら

後

神代より老らむぬののひなこもむしむしあめちしむしきん

もろ

年なりし我もゆひのこしむかたよりおよむすいふ

うら

いまも月めらひとつたりのこいあしん松のふ名も何せ入

五十首 文化二年六月二日

春

心さしと柳えとくしむしひはまのきりぎりすをききけり

ぬまうめ風のさしむしむし柳のふとひとふり後そとつりゆく

ほろいぬのさのさかたをききけりけりけりけりけりけりけり

たつしきすすのれのはなよあはれあはれあはれあはれあはれ

やうのさのさかたをききけりけりけりけりけりけりけり

夏

んありてなひきききききききききききききききききき

むしあめのゆふへとあれとほろききききききききききき

木はもとほろきききききききききききききききききき

咲すしつて人の心もまたささやきゆるかへりあちよの花
深より人よの舟ちよの夏河よつとさうかひて夕すみせ

秋

かゝるもつちあつてさかてなりと秋とて催うとみしせ
思へんもさふなすしつちやうん秋のあそひのさうさきなり
月とほくさる月いふさう秋はせんあよのかほり乃何せあく毎
君きさにおおそなきうん陰もあしむるまの思はれみちか
たのこある秋とてつと里人のかりつむいねのほらしき

冬

秋の雪のふすりららもめさるて氷を神よきふやがさの雪
いらほひの雪乃あつてささるてさるあふなり秋しの雪

雪のちもねのあつても雪をささりつとみよれ雪の
もほくもふよせさるて村ちより浦子の雪みやれふとちあ
こはなきてささるの苑よ年くれぬすこまんをさからほり

春

名もいへば春とてささるてあふよあつてささるてささる
ささるも春とてささるてささるてささるてささる
みよれささるて我すじ君の春よささるてささるてささる
ふよほく名もいへば春とてささるてささるてささる
ま人のあつてささる日陰くほをつれ代もくきてささる

木

かゝるもつちあつてささるてささるてささるてささる

このころかきてきみせよつゆあるひとりたききとるのう松
下つんは波よくらめら浪ひさかかくてくよ世きや原よきん
松やすよ神さひさるいさひ松つのは木よりともせ
村西乃一はくもらぬほかさいま下陰よ笠やうりせん

虫

かひりあき文のてや一よすむ世もあれとやん身のこひとて
紫うくれをたのうすみくと下えて張はくうさうかすの糸
なくちのさひなす祢は廣き野ありとも人よさきてそ臣
ワせと身よふんたすいあももの何なるのうへとのこんを
さゆねははの然あるきりくすあるうあきうふあすあせり

鳥

たぐういせくろ勢とさる人よこす指ようるむかすか
浪のをもたれあれてけさぬは海とよの物れまもさかぬ
松とえてやそれぬ君い山燈乃さよふあもうやまれつ
風あう破よの波やさめう一あへのはの浦うほりす
人すあて年さうやあれよきり何や一き智の勢のこりて

意

絶せいのそめ紫のこたのこまあふこまかこき我や何あり
ちれきこまこまかこまのあおたすわくれす一麻のうほり
う紀あのみふとちせぬ日をあれを社もほくもたへぬ海り
なみこのこまこまや神さぬはえんほしと人さひ絶ても
能為よりの身ささるよまやぬや世のわとさきお

あまきり

雜

月をれもたもいふすれつをき世の流をわらう窓のすれさ
いやしめ身とそ人よたれもへきそいあらんんんんりも
なほさうよかおれすれいそちの流人乃う信もるゆとふ
中くよるそる筆をきされるちる吾う記のんんんんん
おのうんんんねとたれもささいんんん何れもらへん

梁坂集卷九

長歌

またちきるあしと祝をあしいと存けらう信むとて
たいう身はそりしもうらうわひすみい人もといふはれんも
よの人ふらまあそらう一死年をわらぬとせ庵の産を拂ひ
きなうせらおぬきく入て親自ふのかきすちらうりてまのあま
かこよむ人ハハ水とばとひりの梅もりうとひも記らんか
むし叶のをりうき信まうくひすもし信をもらしておのつ
んのときうしうやさはとそれのみすし老めらう何ふきう海
うれしうもゆらうくよそつあまをうらうんんんんんんん
さけしめ若さすもこもむらへは

か—り

うけしも去らむとつけふよりそこれ言をわつやとあはむ
正月のむゆり斗よるの雪のちゆらんとしてすみて
川よ舟をうえて

みよのほすすこし河舟の河舟もゆかことほきよつ洲の堤
をこれちを雪不程うつもれて下流乃つんそりもつす
たちあぶふ本々の楢の暮れ目をこやくすちえてうしくと
きうりそあうり下つ洲をかすすれに流る—舟への洲智
波の上よなよひほしちのこや—雪のすより夕照のこり
かとはりううそは雪あよたうくわうそ者揚

か—り

消せぬの雪もといふ人すさ河の舟も舟りうれは雪

子日遊

そはそめ初る乃雪人よこれ人のいさ—いさも雪もそ小
つせもゆきさるの小松原二葉よみ雪を引くへくすあそ
つ—さるまきよくむや雪のそれこあさるへの梅もあ—
年のさうそをそせうはよふのひもたれそちのの—む—行よ
うくひすも百すらこひそきふよりと雪うそそあつはとあ
雪世乃そとて老め—もつう記もそまか—は—る回く雪を
らううり—

か—り

ふぢう—師も雪ちの若く人まふの子日よはめふ—

八月十五夜宴吉田氏家歌

年月をいつる矢のこころ人の世をいふゆく物そう知こころは
はゆきそりれとあはれいそえわくふ日あしとひす一への人もいひを
まといさうらハ時すくさあやねふとちんやうんとあはれいあよ
秋の中の日影をあくねいして此者一とあはれいあつ
垣よりよこやういすねいひつーとあはれいあつ
来よ一よきりと立そ一あはれいあつ
を折一ひききとふかきとあはれいあつ
露うち拂ひかゝぬいもあはれいあつ
はくみこれのよきあつとあはれいあつ
そ入とあはれいあつ

よきりうけするも何うそけ人々の世乃たのきたかかく
らそいそいひ一あはれいあつ
あ一照月を世ののこころとむ一あはれいあつ
いよの世のこころ今もあはれいあつ
そ乃あはれいあつ
わつよあはれいあつ

くーく

あはれいあつ
八月十五夜の夜芳宴園を月とて
秋の夜乃つあはれいあつ
人よあはれいあつ

あつたふりうけろふ影はちうこの世もぬおともほそと
もたつさけりて月も人もとひあぬふふと我もあて
かゝぬいもと記さきそうもあくあそふ世夜はあそほも
あつたふり

かへり歌

世そのも月ふま枝のかゝりきたつこもやす此月の歌いは

九月九日詠菊花歌一首并短歌

ちるやふる神の世代に記こえさる後にはあつてやほよほ
たひのま乃とくしありかくりき名を傳へあかすも
まいかの國のよほさつふとそのかゝるねうやあつる君世
のさるんすさると木のつうありやあつるうはるんかすりも



年々よは秋そわめて咲とさくふりあれきあつ月乃
けよとさる日とく人のをる乃屋は天酒とみちたは
て世これよあえてもかもと神あつたもほりせささへふ
むくの月にはほい酒なくいしてあふ乃咲力をさす
かゝるたもともぬさう折かさう老も口さきもと後ともふ
らう語をやまつたひさうわの君の世のよらほ世のたひや
あつたふり

反歌

お世もさるふのあつひあえさるや大さ人よ酒酒と満ふ

山寺の秋乃くれ

かゝ山やよけさるちの苔むらりあつるれいさるめさる

秋をかぶりともみち葉も風よきほひておく霜よあゝま
かきとまゝ菊も色さうほらうよ衣襟の世にかくらと澗川の
そやくみよとくり久しきあひ出つてかへるほきあはれもと
ゆりくれ袂ぬもい葎の身れあはせせやと乃への
ねよあゝと入あめよ

かへり家

かきれをよ秋とちめて心寺の岩うきお葉ちりもてまけり
神無月のそめ夜堂の君乃深井の莊のあまよとて
ふく月のそれ乃秋をあゝよのふらりとむる清園を
きふとひあつてゆうれい呉乃てひとあはれ機の子記と
いき波の来よるあきほいたまやめのも深まらるれあめ

ゆいこゝさひありきていもあやまたもほりあくせ
うんあゝとらんとやうていものもあそふこの日くれすも
あゝとせ

な家

きふとけん人のいよとや西園まよあゝのもみらの秋よのそら

山家雪

雪ふれそそほのかき及ゆよかよふ伝らうたゆれそりかうふ
ゆきみの竹乃いつしうも山とありて隣とくこやもかよはす
よーやせの隔てをばともやとるべき友いなくともほきほよ
んやんとそこの戸をひききてこれかきいぬてひりの危
そねもなをけりきわくしとていりしるもまよまたて

ふさねよきりこれきも昔も心位乃身の心よして
ほくの火よ揚よりさひあはれこころし物かつまをかす酒
くむつとさそおもふなわ

反寄

かくそとは都の人よほきやうんかこひさやうのれきり
むそちふありきさやうのくれよ

と一月をいよやのこくおいと身よせあはるものそをれきり
おそのねはわうりむいしあしてさよこふきりもあ
くはさるものあも身あうりあはれきりときふたやうい又
も身人年やふぶとひとせよさひのとあていさかきん
そはねもすれ人よたれかくすれし時子もさくはは

やういかさうつ今さうよ悔よくゆれと老の身のかひとあは
さうはささんほとめてとよりとたもいおらせとやうれと
さう日影のめくさきよ然いよせんあをれらあをるねり
ゆく年を惜むよのきてかくれあきくと人のさうゆせは
んもめてねるうふ思ふもかほすをやむな一かきと
いよ一人とそいへらんあん世の人さふよりすれもあ
あういそおもふねり

えい

その人よいうあう人何とて老よき身よけさうは

橘子陰う家よあ紫葉竟宴よ競憐春よ花
之艶秋よ千葉く彩時よ歌判之とふさのんよ追和

百あふと人ほひききとこあらへのふけはるりそまほくまを折
ていかさーちりあをを神よこ記きてあー引のふゆまゝ
たもよとらんそやつらつ月のおくれの秋もみちあ乃ト
思とまゝやつとんえとほくもみちき本乃もとふれりお遊ひ
家のそとひもまゝさきつま山をまゝもほくろーあふと心
かくそたぬきりつれまゝつてまゝとんまゝふのちゝま
まゝと時來家をと郵とつらつらもぼよとあうんとなほつらよ
んそうばもみちあの時すまゝゆはあうーのいひ記
らん指心は何よすはうんまゝまゝもあそれとまゝふ秋やま
うもむむしゆまゝのまゝまゝ

妙法院まより橋を信々歌めたるまをよほとい
てよめ歌并序

妙法院宮は

尚今の橋のあせのみなれまゝなれまゝいみへのみや
ひいふまゝくこたよせ折ふあまりの橋を信々名言がど
張りの折ひてこゝやよみ大舎人岡本保孝の
一條のたとの橋ともまほあれまゝなれまゝと折そりて
おまほまゝあるまじかふる山家閑居あとの題ふまゝとて
まほまゝせ行へまゝまゝ此百年あまり江戸の大城ま
てあのみ政すうー流ふまゝまゝ天の下れまゝ記を
まゝまゝまゝまゝもほまゝなれたのつらみちへの

し

かゝる人々もおぼくにて来て言の條も名もかゝるやも
うもあれもきりたゆめれとかるかゝるおぼくも
そかううりそきよおもてねりかゝるはさるるなり
なきわさるる人々もさるるその身乃ひさしくたひかき
ほりれあゝめいのはかくて縣居者々々へのあはれ
ぬへき時うれもさるるやうにめれするははたすま
してはこれとちうとちう

たゞあゝおぼくもさるる言の條れちよあをたふさむきて
さるるもうりそきよおぼくもさるるはさるるなり
さるる人々もかゝるほりて年々へさるるさるるもちひ
るの測乃もさるるさるるさるるさるるさるるさるる

さるる言の條れちよあをたふさむきて
さるるもうりそきよおぼくもさるるはさるるなり
さるる人々もかゝるほりて年々へさるるさるるもちひ
るの測乃もさるるさるるさるるさるるさるるさるる
かゝる言の條れちよあをたふさむきて
さるるもうりそきよおぼくもさるるはさるるなり
さるる人々もかゝるほりて年々へさるるさるるもちひ
るの測乃もさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるる言の條れちよあをたふさむきて
さるるもうりそきよおぼくもさるるはさるるなり
さるる人々もかゝるほりて年々へさるるさるるもちひ
るの測乃もさるるさるるさるるさるるさるるさるる

さるる言

さるる言の條れちよあをたふさむきて

さるる言の條れちよあをたふさむきて

あはすちのたれおくあるちつのかたなれてもつたよちをけし
むうもかくや山河乃ちやまきせすもむあをよあちま
卵布のせきけりしよこのはよりいつまよきりこれきり
いやき箱か身もゆらひにゆらめあめさむはわすれんあ
ちりある布りあれよき人いれもすはりきとくれも時よ
ひくれておられをかきけりいとすかほあるけうわささ
移りゆくまももうけりすいしあゆらうとちよ傳へぬ
そめてたれまよもあやまじういんまよもゆりま
布りまうこやまのえらるおん君のてまよししてま
いるのまゆいよまほきまきまをまよせとて細布とさ
もちまてかこにやみまのまよまよまよまよ

みちかくれまの細布せはくれまよまよまよまよまよ

擬送遣唐使歌并短歌

てやあひまよまをけりま風まよまよまよまよまよ
う海ま夕まよま流まよまわまよまよまよまよまよ
うまよま風まよまあまよま神我大臣のちまよま
まもちまよま國まよまあまよま海乃汐の八百まよ
あまよままよままにまよまれば姫神のみまよままよ
海まよまいまよま四の船まよまあまよま傳文機のみまよ
まよま中まよままよまよままよままよままよま
まよまよま

大王のみことかこえあしーほのうつくしく海も籠ねすしーも
丈夫を名をしーまへーしー國のわひらるるもーもーはくはく

擬送留學生歌元經歌

日の本乃やまよーほのいし地のかたあー國としーよりい
つよもれと吾大王神のみとあしーわはせと師いー何て
いや陸よこさるる人としや玉の大きひー言さそー
道のさしーまふさよるーたすけ人と神あしーたもあか
てそれとーもとのさつー言さけてよれとひまもあふ
八十伴のそ乃あれつまーいふともをとりとひまよ
行へいーたやー若ふうともい新代のみ使とる大船
いさふくれつーかーさや父もあよとーもさや母もは

なれいしとあし國のそまこいしやとほく別ともあし
の格しーあしのやおほらふ年ふはゆをんせのあ

まーしー

こやまこく國は七年ごふまこいしはらるよちいほかあ

觀琉球來聘使作歌

下師やあしーれ少よとちをさしーきい大社のごほり
港門より大船とあしーしー時あ天皇のまきのまふ
天の下もひすはとやひろよ國をあらと集人のさつ
乃國のみやつるもさるわせとさへくみふらよー海
こはしーらとさしひまきしーてささまのうらつやけとさ
ささめ竹ひぬまれとさいやはおくし新代のけめめ時と

國不ふいこほひすよ海東をゆうちあゝぬきあゝいを
岩根ふささみこころよ々もすおあゝまつ島人

詠王昭君歌

雪よりそあゝれなされてねもすゝおちく風のあゝ海お
秋床の上よほりくゝと枕をほこて寝かゝことさひいづれを
人のせまゆめなりまゝかゝはるこま記いやゝも我もま娘や
かゝまゝくられよまほのうらよいつたりゝまゝあや海神よあね
て白玉をかつらゝゝばゝたゝみゝるおもくもあかくはゝま
ふのたすいよ家あゝくつとさゝあゝて大王乃覚くゝあゝ
あゝぬくゝいれゝゝとさゝ思ひつゝさゝもものさゝさゝあゝ
あゝよゆゝゝゝはゝはゝ縁のあゝゝあゝあゝあゝのいつゝりさゝあゝ

あゝぬきゝゝゝいせんすゝとさゝいひゝゝぬ國の界よはゝい
いてゝらゝらゝおおそける袂の雪のよゝゝとゝいゝゝあゝ
約の上よまほゝゝゝ四の法乃たゝぬ恨をほゝまゝあゝ
せゝゝゝゝゝゝの命とゝとさゝの身乃ちりもゝせ
あゝとゝさゝもゝほゝす秋来てもおゝもゝとゝぬあゝやまの
あゝゝゝゝゝせ庵よつゝもあゝゝゝゝ年ゝかゝの
つねゝいゝあゝもかゝはぬ玉人ゝほゝとゝむつゝたゝやめ
よゝいゝもたれぬかゝ衣神ゝゝかゝゝもほゝせんとは

反歌

まの目れ光もゝ紀布ゝ極よまのゝやゝりやゝゝゝのゝせゝ
あゝゝゝゝのほゝゝ紀館長とたゝへまゝゝもゝ

ハ書とけいつの國ありたり書とは何人皇神の神
の造りより言魂乃さ紀乃ふ玉の國布りそそくは傳へて
あつ多一の蒼系ケうよとれくも成るしけさ山はく
それのさくアも色も香もあほふくこくま盛の時もあせり
かかれこそ聖とせもたれくある人をもりれあつの成り
たつあふまの中つせときこゆさそは名くけくつひつ
人もたひすひあれつふよたりかきもそめてたゆをい
すふおまゆもあつ玉もあつひのま乃新をそみよは
しつろ天宮の神のまの神あつ神さひせんかおき
あやもつちささうむりおまゆのてか紀や大治もほ
つろもつてはくアもつてめつこゆひすまひ新へくち日

またまのや人の君のあはれをよき言様よちものほひ
されそよのやねきふつこつかそふもゆふふおね
ひきをひりうハ大冊もや風もあらわくはさ書あひく
月まの神あすりの色よいてまぬまほくあはなてそ
うばらひゆもて皇神の國つふつりこもりぬの下よか
かてあめさそあゆふさひんさきもあつてあまそ年
屋もそふさうもろんも岩もさし例のあつおまをそま
ちてあつたのあれやまのいさおふさきさそつ大治
よまのちさついあへの記をのそてあつてさつとあせ
みつたふおまゆもあつ神代よりそくわさをよらほ代
傳人もゆきと紀の録伝ふみさのりてあまの子孫のあ

かきつゝへんしせ終へたも底よきほめる玉も波のうへに
光かよひ浮雲をいふきはひいて照月の影みよきと
こよのさねくふもありさりくよせよあつたれつさよ
名つきもいらぬ此粒粒のたなきいよきあやまふさき
かへーい

玉の星のかくきる弦よ

あぢあぢや南は星のくみさほいつの世より此世も
阿もりいずしていひぬ神のすくさくほきよの人よいぬん
かあしとまほのよれをくれもあいつほさくしてたよき
ぬと牙よもわくして玉の弦乃あきこりよまきくぬ直か

おさうてあせふへき神のそへをその人よ借へん者とて川
ちみはもまらうせりそちみとらんよもかを神とてまき
よしもかをたひひのそなたちぬとほらみあふきもり人

舞豊は所はけりこちへゆきを送る也分

云の原乃道の刻一とあふきく神のまををけりみちや
いらひか本の山寺よいそい初きんを乃かきつとくぬや
中つよふそ名ねとそり一奇人のまはれ者よとのおく弦
そしこれにやまき世のこまよをあらうそそ音のいよあま
玉露の身よもあれとまふ一ほのちれもありまもんも
くまひてその神よほくふまををたのり身れさねをいあ
よほらほひそいそれい若ねりふそりよ向経タラ

いさふ本をかきけしははむすれと年ふのちりしあぬ
とやとくちちりすふたのほろつ苔のむくかこを
ゆきあひのよもりきくよもりくを雨をさくかきし
うれすかくるありえんかか神の雨あやす
はるひすむいり里人はあひかきく軍人もせんす
すとほ里もむいすれと誰しもいよかせすや
我身をちよもきこを思ひおひて廣あよねきこ
ほききもちのさく部へいりて来てかくこを
くよほれいおく人のいひつきりてほるあるはきこ
りそと我誰もめつこめきか人をおわくあ
ろはあれもかくのこやれすいよい文を造る人の

なほあぬちをこをいてむくみちよんわりたのひ七こえ
あもりてけくとも里のまのに戸のきよこま
てやちあこまかあかくゆきしよかあ月をま
もかつやすこまひへ東のひれよあの人乃いひあ
今をすこもかかおはあかきもせやぬ
もく國人もすわり来てはうすたりてさくよん
とやひくくこをさけよほいもれも中もこの
及あひ人をやきもさるにもあて多くれい思ひ
清根も我をその松皮をいぶらりてさく
あひ何くもへはもふとあぬこめきくも山は
ぬいさくこをさけり新文子言わさく造り法の師

かゝり歌

町をぬてかゝるは乃とも一犬はちとひ思せあまのあはれ
西風を吹く山は静を送る長歌かゝり歌

神さあをくくぬを軽ひよのたてたはなほまきとせそ
國のまほく常ふまをくくはてて天の下はもひすせこ
皇神のよはしぬすよあし魂を伝よりまはり御代り
うはきすせもあの大官人天皇のまは使と年
のそよちさととてて翔たぬありかよひつて鞍かゝる八十
伴のよい思ふもよあきてまきとせよまきとせよ
まきとせのつくひさもひ月よまは八海の國のまはりあ
人絶ねる心も松原おくも馬車つゆきかゝるひ

やまよふちひらの谷も家むくみちてまきりまきとせ神
のま山天皇の御代乃三原のとその人乃ひつとせぬれ
倭文そのめまきりむきとせまきとせまきとせ
つるあまきかひきとせまきとせまきとせまきとせ
まきとせまきとせまきとせ

かゝり歌

朝日子のまはらのぬる二荒山たてまきとせあまきとせ
海量法師のまきとせまきとせまきとせまきとせ
まきとせまきとせまきとせまきとせまきとせ
まきとせまきとせまきとせまきとせまきとせ
まきとせまきとせまきとせまきとせまきとせ

きつりきつるねよたりしるものさわきしひきさむるさうり
もくしなれてぬの衣す神もやまたる枝ありたり結つ
いつくより来す及さへ六年ひさしき名をきうていそしめ
あふみの國ゆき流くとわれをさひくとねも流るる君そのせ
るまうれもたきのありもあきへなき世の一人いふも國
のすて人わのめいよばしあは流わつくらいあつてもあき
をいつくさ海の人さきうてのはしりみりもさよはせうとも
くあやしきかもよましりかめさち

よりのこも乃流とてよあ

檀東れ日知乃流皇の百ううは世流ふよりきう天皇の神
のみくさいしうまくもかこまれも天つ日のくもりあせは

天の下照しとまふと食國をささあたすよと神おもひたを
ほりて神をりはりはりしゆきりうへこそ天のやう人
いやさは人いあれもさうりさすりしきあうゆりやう
たれしあやも楯のまはらとけきをよ流軍とすまなすれい
丈夫もみりしゆきむきもあひりたりし大王よは久
ゆつとぬも玉の取をすりしはきさるち腰もとりて死
あふねさけひひいさうらよ梓弓もよりもらて軍人あは
もひつれてもほろもぬもあひくちはややんもふらぬ
やうしうがくしあは木術ふのさうとすしきんいしうへ
まはりの世と今れ世もさらんいすまんと大船のさひらあひ
よの人さきさきしものさう死さのすこさ備よいあひさみ

たればさわかきまかりあものみされあひつゝ思ふさあすかふよ
かたしくさやすかしくあくよいんすくせんすくさくさあすかふよ
さききんも物象のけふいふぬへく甲ふ落のちりてうせぬさ
神あつ神のみこれこれのゆゑよまことやくいひて
いなりかひてやくほまよーたむしれまを物象のせとらさ
さるゆる芽野の嶽乃てうまそりまかふてさるさ
ま極心のさるまきとみよとあつて岩ささつ流つ河の
外のまあつみはのらとみー流いふささささささ
ー乃さうまあつて大ままあつてさあてさのよまあつて
きさりぬまこれともいへどもあつて心河の神もつくすあま
さささささささささささささささささささささささささ
ささささささささささささささささささささささささ

とらればこれいかにあつても

かたさ

ありまきささささいあれいあ人乃たまわすれまささささ
いなりさあもーああよあさささささささささささささ
さささささささささささささささささささささささ
さささささささささささささささささささささささ
天地のかさりー國ささあさささささささささささ
あさささささささささささささささささささささ
わのまへいささささささささささささささささ
かみらよのまきさささささささささささささささ
思ひさめさささささささささささささささささ

何きすしれい山の雲よりとハきかよきて大徳の川
とれハ五つ帯はゆげ思むよ落とふら水沫くすけ大
雪のちりかふと下つ根を十のくゆふよる波のうげか
みず起て大雪のふゆふあせり神くかろそあやし起
國うかうくそさやまおかすつやけあ代よあまかよひ
はひよんともあふくめやも

五十一奇

落つ起つゆ川岩むしよ波布りて山も落よひくきあひり
本岩れみくきをささけてよあ

野つもの神れ世よりむしようしよあなるみすか
伝達のあもそら柱のま木のほまそもたす儀よはる

波のむしよあせり本岩川のあまのしらこち高山のさほ
あれともむしよあまのほまあふとさちくの山れかろあ
すたりくそ起おなきその本岩の山嶽をかこもたせ
らあやしよもすそ神の神あく神さいせはとみ
海のあふと起に物さる風そりあき夕はあ風らさ
如きをれくきよいあきほこれとほきもつゆふほく
そ風のさゆと流れを六月のばちとさきて照日も雪そ
ちりきつとちくもゆしきかも本岩れ神さる

かーうし

空われるみくき神さいれとちて本岩のむしよあなる
かみ茂方人の山墓のものと石文をさきさる

おもりの泊瀬に國の船倉よまはしくありて天の下に後
—のききる天皇のそと後世に極輕なるすけたまきとく
城—とてたすき名を石文の極に載てあへてせりた
へまきりとまき—はよいひつきまきりいりへもまきとあり
くれまきと—またや—いりてさ—りわが後世の極くあ言の
まの道より—かきそゆ名よ—を岩の上よありてもかきと
箱を—まぬふ人もあひそりおか—へとも後人を誰も
うけあひいて湯わく伊豆のまぬよありてさ—りわが後世の
いと極とやさふまきりて後世に極もふれせて後世の極
の磯石の百—の十綱とてい—はひふまきと—り
さ—りてま岩角と後世に極もふ—りまきと—り

さりそらそわ大人のありへは—まきと極もふ—りまきと—り
まのあ—とをわ—りまきと極もふ—りまきと—り
あ—の年よもか—りまきと極もふ—りまきと—り
まきと極もふ—りまきと極もふ—りまきと—り
まきと極もふ—りまきと極もふ—りまきと—り

常世麻呂を
おぼへるまきり

反所

君の名をまきのいほ名よひまきと極もふ—りまきと—り
まきと極もふ—りまきと極もふ—りまきと—り
まきと極もふ—りまきと極もふ—りまきと—り
まきと極もふ—りまきと極もふ—りまきと—り
まきと極もふ—りまきと極もふ—りまきと—り
まきと極もふ—りまきと極もふ—りまきと—り

まうたくりよせりしうめふらさき入はるわきかつくとすれと
その玉をひろむもつとつとあまのほろとすれと花のきり
もとれを捨ひゆめと玉のこたきりゆめあをれ乃こと
皆人のゆそま一つむりより思ひ下といて古言のうさ
おくりとおひくといひつききしと沖つちを花のねのせ
りあつたれりて人よりたつききしとまらりしこと
よはるとも言魂のたすけもろと所あふ人もなりおひ
あさあせ何ゆめもやすへる時の房もかくばきぬよお
さゆおねもたきぬつとゆいをあさ月かきゆ年もへは
まふよそとあつとちりもおねもふる山路を松のたき
思ふこころたきりゆめ隈もあつたれ管陰よなりおろし

の吾もれい存のうらうらかくるひり名跡ふまれのきり
ぬふいそれうらあまのふま玉のゆめとほろといてあひ
よねのつとちりぬ國も世の人乃かちほろひくまらちり
人もさひさきいとちりもあやゆめと大層よをなきりて
あつちりよはえすつとせねぬあつちりかききつ代のこと
とほつとねもたきよおもほりてあつちり人いあつち
うはくしぬめを捨ひてゆかききき名をけりてあつちり
人よりぬめとちりよかものねとちりよをさひいつれか
はまきゆりも

反寄

あつちりのきとほろしとあつちりもちりぬり人きいやりはろ

考くはしき君の心は空のよほひらきあせぬふはあきれ

柳倉のわうれ殿のわ北方うせ流ひての又乃うのそ

ふれもよこそきーのふらふそを人へよあはれ

まの附よよみてなれるあ

年月をふくますれとま之をそあめれさくふいぢを
ぬとるも君とせばすこもよはへを望乃ううハかくこをま
よーやさはいよも人人もさうあふ附もあすすれさく
流園の芝生かきかてあをあらし野戸出よ君をさくれと
ハ言家とちや屋さつる君の来なく相さりかす陰子
ありあてゆふ庭よ君をすまも入日さけくきや子ううよ
影うーとらせばすれとゆさうはあひもみすーやうはせら

人の心世にそくれくあひといへとふよりもあはれもの
とちもひよやえ

かーい

嘆てれよ人ーもあを母もあふちうも君よあを御もあを

ぬひ子う三年れは

まきまけの年のみとせに所かちゆめうちーてこのひつは
その子うもすはえちかくやありーとすひひ出てあやめのとそあ
ふくもねを袂うかちかくけきふとちをれをまぬきう
うあれまきいさみとれのちやの影よをほれてふほくま
あやなくもあく縁さへきりたもとくーよ

反り

おすれ名ふとらとれをむよぬき神もなをせ一人のむうを

三宗院雪岡禪師の行め

禪師の江戸ありきり時
金地院の松月をすり

人の世を羨ともゆめさほくれかきあみありありきり善徳の秩
わりのと都よりいよまいて山松の梢乃月をま乃名子
か守てすみり法の師乃をさしおまへにさうくあふさこそ
おつうつー身とありし世をたすまをまほひつあひや
おあふさりくことよ月すあはともいことよふさきはよ
たつさけりてあふさりくもたうけそのまねなとむつひて
ひくちのゆきくひーはくうはみまきまのそとらく
もとの法法の庭草をまろーふりきてさうまらりても本は
そ名かいたわことをせおまかのは六年りつとせ七と替や

ましくしとせしと愛をわすて別ありはいつくと侍あひく
て一報への人乃かくく君うまは法の師をさ死めあひ
ある罪々今の世りむくい来よき人あよそのあうーねや
おささへ乃はくささめしてはつさうと仲の小島乃ちすもうよ
りてますあとおおせことたすひーあふひり月あよはの浦の
うう借ひ舟ひききしては見り身を西くせぬとほそくかふ
けしよくくつたれとも子里の知よ海心を厚くそをんを
まらんと人のいひつおまきく人のばさーたうある使
まもかもと月あ自あすちつてそれ新波あついのやもう紀の
いとさうふおまひおうしてあつ鳥翅あかる玉音早のたより
うけーとあふの世をひききてこれいさあまかく仲の小島

ゆく舟のゆきもそそぐはの師をいそひけちのうゝかき
才子さくへばとささるまきけれよ告つたもあきせかくは
つゝひをえてたをらき一度に布一てもよひいよはきて
かきよそつすせんすんさる

反方

かのあしよしとらんさうたをねをあらうさうさう

海とあきさうん

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 'あしよしとらん' and '海とあきさうん'.

此琴よりれ集ち父のおもさうら語り一車たもさ
ともうくもさあをゆいぬほとふみまりささひ
あはかたうき残りれおいたうぬめさまにいつふ
志なき神かくさあくよ志なきさうあをよもさ
えくれよはまふちうはすもくれとねなゆらふ
かよ集むとほせとちううなきさうれうらよたむ
あはねちとけなくわとちてなりつはほへ
碧靡ぬの野らにうらうらかりあはらうら
きよあられうほを瀨かぬよそかういあは
なうてやうくあみされと神うらゆきほら

ほいろかく板よるありぬらうれきあさあん
あのおれと今おれをなき人の見ふもあなま
りー六遊うらよあなぬもるぬ魚くすたお
入路へありありた人もおほくをれさるん
いっりりかあなき事よけしうんたたれめ
不あのはちもりき

文化の十と勢もほきあむ回のきき子

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

かほーらほなまーてら杪の木のたた
のくもまーちをれほりーてらと
えあわうつらあそなまきいんやますれか
あをそめ林よいて生陰をえーそん
らそえまーかあつとくあまーうつせ
れまよふあうれまあまーまらそあ
よあうそんて夜野のまれの民お本のれ
とおもあはらそなきあうにあまらあ

るにかゝるよたうに流して山井けう万阿
さ支おれらのかこまかをたあむへき
わましくなくあんをるる古よわのけいり
の大人れうらわ思ひ残のせん子とあてよ
こおまたまへ古とあをれ残へてあ阿
ぬらぬらう流し出あをてゆむらあ
ほいかなまきあれいさうい板もあ
あんとしよんわ阿るにかあをてあおれ流

ようらうらあおきたまあぬらあわあれ
秋神の花れいらくよつみとあたま
ぬらなをあきくらあまよああめてく
さくわあをさうさうてああ阿つあ
たまふらあうらあまらあまわあうけ
らあをうおあれらあたらなれてたあむ
つきあをあああああ大人ああああ
れまをてうさあああうてああああ

ていつしへよのほりゆのむるいそと家迄ま
本をみおへなれかるとりうとわらうけき大
本わつたよひるいおねたをあひしよるいよ
わうそり何うしてさうみやびあなうそりあそ
成をひらふべきいそよあをなれわくて今より
冬とせわのちとそせとんことわう何お
阿まおにいさうお存や何々ほるとかくあむ

文化むとせも月 行忌芬芳香

月雪これたさきほをさうかもうさあむ
うわきをりもあなれたりもかなきこ
をりよあれことよ何うう年はよあむ
おともの厨子乃うまあむ埋まればおのつ
ちりうせなんうもあまうたああ人よ
そわあされて此ちがさやうよりかよもあはあ
梓ああ不せうんふとたもいそらたずひそ
おわれよ法書のうらまそそもあつてへん

ほととぎすのやまの底よかしくせし給ひて目くる
めくこも残ひとすまふとうれへさむ新ひぬきハ
何事も忘さしてばひも身侍のあひぬき
いと不ひなく思ひおるもと文あらしまふれて
たすまふ体あまひうーのみう話さしを継ぐ
あせまのものせしれしうす終へておのれも
ちきわしすふ草とあぬれと拙さは中しく
人より後くつめくささくけさよなんささくあま

清あともうーのなれうへを痛せんにおみきかく
あのかむひのいつのちのさるつよもあしねと
只おもひあうねるすう話さすとつらなるたむ
きとはまこととよ世のな人とちとねなり目ふ
かこも人あらしはあすす侍とかの秀あつそもつハ
うこよみなり二首をよもこころ首ハありかこ
と長房卿の流ひしようこ此集のめ
あるとははいつ斗をそぬつよものあり

文化の十と号からを月室の後の日

平裕康識

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

文久三癸亥年春二月写畢

先光藤原清風

